

35

特 251

645

演 集 第 十 四 號

夏季講座講演

經濟學博士谷口吉彦氏講演

國 防 と 經 濟

法財人團
京 都 府 國 防 協 會



* 0018668000 *

0018668-000

特 251-645

国防と經濟

谷口吉彦・〔述〕

京都府国防協會

昭和 12

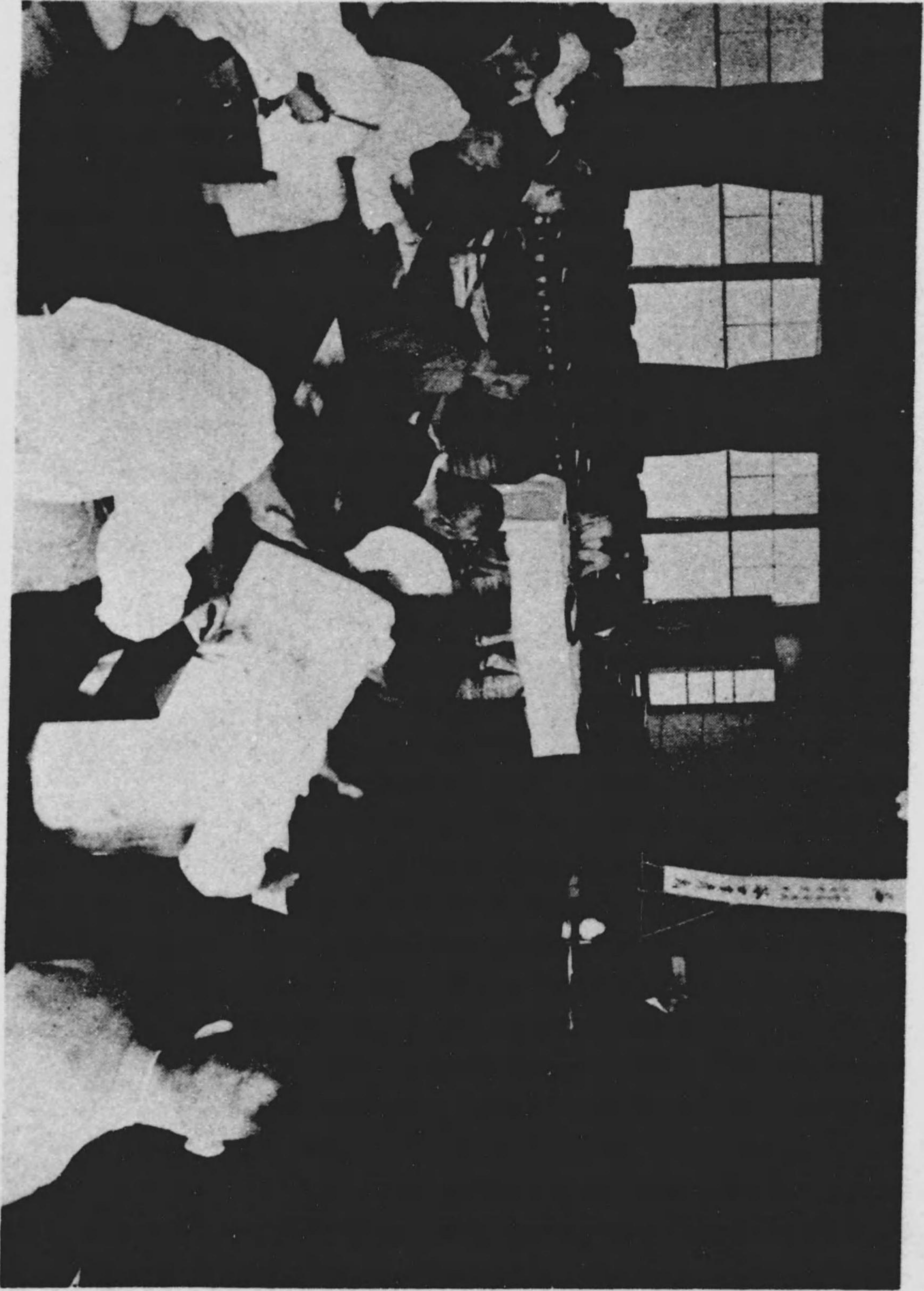
ADA

特251
645

本編は昭和十一年七月二十八日日本市府立第一高等
女學校に於ける本會主催夏季講座の講演速記にし
て講師の校閲を経たるものなり

昭和十二年三月

財團
法人 京都府國防協會



演講の士 樽口谷

國防と經濟

京都帝國大學教授 谷口吉彦
經濟學博士

國防と經濟との關係と云ふ問題に付て暫く御清聴を煩はします、國防の事は私は素人であるが、經濟の方は専門に研究して居ります關係から、多少自分が平生考へて居りますことを申述し、御批評を仰ぎたいと思ふ積りであります。

最初に先づ序論として申上げたいと思ふのですが、國防と經濟との關係に付て、今日の日本、殊に日本の政治家或は世間一般の人の考へて居る通説とでも云ふべきものとは多少私は違つた考を持つて居る。其ことを始めに申述せやうと思ふのです。其通説と言ひますのは、國防と經濟とは成べく調和させなければならぬと云ふものであります、政治家に言はせると軍事費と産業費との關係であります。國防即ち軍事費、經濟即ち産業費、この軍事費と産業費とは調和しなければならぬと云ふ主張であります、是がいろいろの形をとり、いろいろの人々に依つて、今日の日本に於て殆ど大多數の人々に依つて唱へられて居ると思ふのであります、是は極めて低級な常識論としてはそれでもよいかも知れませ



ん、私もさう云ふ低級な常識論としては強いて此説に反対しようとは思はないのでありますけれどももう一つ深く徹底的に、理論的に、殊に今日の經濟學の方から考へますと、此通説は誤りであると言つてもよいと私は考へます、此の調和説、即ち軍事費と産業費を調和させなければならんと云ふ説は其根本はどう云ふ理論によつて立つて居るか云ふと、結局これは國防と經濟とは矛盾すると云ふ理論が前提になつて居るのであります、此二つの者は矛盾してどうしても兩立しないから、それで成べく調和して、一方の方が一方を取つてしまはないやうに、成べく調和させて行かうと云ふ考へ方であり、其根本には國防と經濟は矛盾する、本來の性質は國防と經濟は兩立しない、だから成べく兩立させて調和して行かうと云ふ考が出て来る、さう云ふことを明かに意識的に考へて居るかどうかは疑問ですけれども、もう一つ分析して深く考へると、さう云ふ理論に立つて居るのが今日の通説であると思ふのであります、丁度之を外の例を取つて言へば、労働者と資本家の關係であります、資本家と労働者は成べく協調しなければならんと云ふことは今日の常識上認められて居る通説であります、其前提にはやはり資本家の利益と労働者の利益は一致しないと云ふ前提があつて、此二者は常に争闘し矛盾するものであるから、成べく協調を計つて行かなければならんと云ふやうな主張が出て来るのであります、だから今から五六年前、労働者と資本家が非常に争闘して居つた時代には此勞資

協調説が非常に喧ましく唱へられて居つたのであります、今日では労働でもない、資本でもない、もう一つ高い見地、之を國家的見地と言ひますが、其全體の國家的の見地が強くと出て来ると、此二つは協調するのではなく綜合されてしまふ、國家的見地、若くは國民的見地と云ふものに綜合されてしまふと今日では勞資協調説と云ふものは殆んど唱へられない、殆んど全く問題にならないで、而かも労働者と資本家は全く協調して吾國獨特の氣風がそこに醸成されて來た、是と同じ様に、國防と經濟に付てもさう云ふ風に私は考へる、私の結論はつまり斯う云ふのであります。第一に、國防は經濟に依存すると云ふのであります、即ち國防を完全に爲すには經濟が最も根底的の力である、だから此二つは本來根本的に矛盾するものでもなければ撞著するものでもない、經濟が盛になれば則ち國防も完全になるのであります、それから第二の結論は、是と逆の關係でありまして、經濟は國防に依存する、即ち經濟の發展、助長、振興と云ふことはそれは國防に依つて出来る、ですから此二つは本來は殆ど二にして一、一にして二と云ふ關係に在る、斯う云ふのが私の考であります、今日のお話も歸する所は此二つの命題、即ち國防は經濟に依存すると云ふ第一の命題、それから經濟は國防に依存すると云ふ第二の命題、此二つの命題を明かにしよう、之を理論的に根據づけて行かう、斯う云ふのが私の大體の講演の趣旨であります。

そこで本論に入りまして、第一の命題、即ち國防は經濟に依存すると云ふ點であります。之に付て先づ第一に考へたいと思ひますことは、今日の所謂時局の認識と云ふものと經濟、時局の認識と國民經濟との關係、之がどう云ふ關係に在るかと思ふことを先づ第一に考へて見たいと思ひます。今日の時局の認識、即ち二月の東京事件を契機とした今日の時局認識と云ふものから見まして、總ての人に認められて來たことは、第一に國防力の充實と云ふことであります。此事は二月事件で以て始まつたことではない、是は今日の國際情勢を、殊に經濟上の國際的對立から考へて見ますと、要するに今日の國際關係は平和に向つて居るか戦争に向つて居るかと言へば、言ふまでもなく是は戦争に向つて進んで居ると云ふことは、間違ない事實であります。どちらがよい悪いと云ふことは別問題であります。が、兎に角事實としてはさう云ふ傾向に在る、又何時第二の世界戦争が來るものか、それは來ない方がよい、理想としては來ない方がよいに相違ありませんが、併し何時來るかどうか分りませんが、兎に角傾向から言ふと結局其方向は平和の方向に向つては居らない、戦争の方向に向つて居る、特に經濟上の國際關係から考へればさう云ふことが考へられるのであります。それで時局の方向は世界戦争に向つて居るのだと云ふことを認識すれば、二月事件を待たずして明かなことでもあります。が、國防力の充實と云ふことが非常に重要な今日緊急な問題である、此ことは既に一般に認められて居りますか

ら多く言ふを要しません。

そこで第二に、國防力の充實と云ふことになつて來ると、次の問題は即ち財政力の強化であります。國防は財政ばかりで定まるものではありませんけれども、併し國防の重要な物質的基礎は財政にある、従つて財政力の強化と云ふことが第二の問題になつて來るのであります。是が昨今新聞や雑誌に言はれて居りますいろ／＼な問題の起つて來る根原であり、また來るべき通常議會其他に於てこゝ暫くの間は此の財政力の強化を中心としていろ／＼の問題が起つて來るであります。

財政力を強めるには誰が考へても二つより其方法はない、一つは租税即ち今日の増税問題、一つは公債を發行して財政を賄ふと云ふ公債問題であります。こゝで問題になりますのは、第一の増税をやつた場合に、それが一つは國民生活の安定と云ふこと、それからもう一つは國民經濟の發展と云ふこと、詰り増税に依つて國民生活を不安にしないか、國民經濟を壓迫しないかと云ふことが問題であります。國民生活の安定を圖ると云ふのが時局認識を有する現内閣の標榜する一つであるが、其内閣が國民生活を不安にするやうな増税をやつたならばそれは矛盾であると云ふことになつて、政策上の破綻を來たすと云ふことになります。而して又此増税に依つて多くの税額を擧げよう、今日はまだはつきり決定はして居りませんが、少くして一億、多ければ三億、そこで一億乃至三億の増税をやらうと

云ふ形で見えまするが、三億以上の多額の増税をすると云ふことになりますと、どうしても國民一般大衆から少しづつ取らなければ税額は擧がりません、是は一つの租税の原則であります、大きな者から澤山取つても税額はさう澤山擧がらない、税額を擧げようとする、少しづつでも多數の者から取らなければならん、即ち大衆課税は免れないと云ふのが租税の方の問題であります、同時に増税すると國民産業——商業、工業、農業、其他の國民經濟の方を萎縮せしめると云ふのでは此増税に對して一つの困難な問題が起つて来る譯であります、それで増税に付ての問題は、一億乃至三億の増税をやつても國民生活を壓迫せず、國民經濟を萎縮せしめないと云ふことが一つの條件であります、それから公債の方に付きましては、公債の發行と云ふことにもまた困難な問題が伴ひます、即ち公債をどん／＼發行して行つた場合に悪性インフレにならないかどうかと云ふ問題であります、是は今の所は日本の公債發行は非常にうまく、殆ど理想的に進んで居ります、それは最初滿洲事件が起つた當時には支那は勿論のこと諸外國では、日本は結局財政的に行詰まる、失敗するに相違ないと云ふ觀察を下して居つたのでありますが、それから後今日までの経過を見ると決してさうではない、公債發行が理想的に進んで居る、それで今日では諸外國は一つの日本の不思議な現象として最近では諸外國の學者が段々日本を研究して、どう云ふ譯で日本の公債政策が斯う云ふ風にうまく行つて居るか、詰り公債

を發行しても悪性インフレが起らない、うまく公債が廻はつて居る、即ち今日まで全く理想的に進んでゐる状態を研究に来る有様であります。是は御存知のやうに日本銀行のマーケット・オペレーションが理想的に行つて居る、即ち政府が公債を發行して日本銀行に持つて行く、日本銀行はそれに對して兌換券を發行して政府に渡す、政府は其兌換券を一般に出す、さうすると一般國民の上に金が降つて来るから、今度は日本銀行が公債を賣出して資金を吸上げると云ふ、此資金の循環が今までは非常にうまく行つて居る譯であります、是が果して是から先もうまく行くかどうかと云ふことが今日の問題であります、詰り公債の消化力如何と云ふ問題であります、公債を日本國民が消化する力がどれだけあるかと云ふ問題、此の公債の消化力と云ふことに付ては、其方法と時間の問題で、今までの遺方は非常に其方法がうまく時間の關係が非常によかつた。之を譬へて言へば、吾々の消化力に付て見ると、吾々に米一俵の消化力があるかと云ふと誰もそんな消化力はない、精々米は一度に五六合しか消化力がないけれども、こゝに時間と云ふものを入れて、一年間に米一俵の消化力があるかと云ふと誰でもそれはある。或は一生かゝつて消化しろと云へば何十俵でも消化力はある。それと全く同じではありませんが、比較的似た關係があります、消化してしまつて餘力が出來た時に又持つて来る。つまり其方法と時間とを考へてやれば、まだ／＼公債消化の餘力はあると考へられます。今日の低

金利政策と云ふものもそこから来て居るのであります。

御存知のやうに低金利政策が非常に進んで來まして、金利生活をする者は非常に氣の毒であります。が、公債政策と云ふ立場から申せば低金利政策は絶対に必要であります、従つて赤字公債が是から先まだく續くものとすれば低金利もやはりまだく續くものと考へなければなりません。それは何故かと云ふと、金利と云ふものと公債の値段と云ふものは常に逆に動くものであります。低金利になれば預金を引出して公債を買ふ、従つて金利が下があれば公債の買手が増すから公債の値が上がる、つまり金利が下があれば公債が上がる、だから公債がドン／＼賣れて行詰りを來たさない爲には公債の値段を高く維持しなければならん、公債が暴落しだしては誰も買はない、今まで買つて居つたのを全部賣出すと云ふことになれば消化力は出て來ない、行詰まる、それで、今日の場合は公債の値段を或程度に上げるために金利を下げる、そこから今日の低金利政策は出て來るのであります、低金利政策を採つて公債の價格を或程度に維持して置いて、適當の時に適當なだけ賣出せば公債の消化力はまたく急には行詰まるものとは思はない。だから公債は百億、二百億と云ふ絶対額に依つて消化力があるかないかと云ふことは考へられない、金利の關係もあり、社會情勢の關係もあり、その方法と時間の關係もあり、決して機械的には考へられません。

赤字公債を出すと思性インフレになると言ひますけれども、併し獨逸の場合で言ひましても、悪性インフレと云ふと何時でもすぐ獨逸を引合に出して簡単に考へますが、獨逸は何百億と云ふ巨大な公債を出したからあゝ云ふ悪性インフレになつたと考へる人がありますが、それは間違ひであります。獨逸は戰爭中は何百億と云ふ公債を出しても決して悪性インフレにはならなかつたのです、戰爭が濟んだ後で國民の緊張力を缺いてしまつて、經濟の方から言へば、戰爭中は戰時統制經濟で引締めて居つたけれども、一九二〇年になつて戰爭が濟んで、もとの自由經濟に歸せと云ふので、其爲に一九二〇年から始まつて二四年まで非常な悪性インフレが続いた、斯う云ふことから考へますと、吾々の考では公債の絶対額と云ふものと悪性インフレとは必然の關係がある譯ではないと云ふ風に考へられるのであります。

併し何れにしても増税と公債、此二つをやつて行く爲には何としても其根本はもう一つ基底の經濟力、國民の經濟力と云ふものが根柢になる、即ち今の關係から言ふと、三つの力の關係、國防力、財政力、經濟力、此三つの力の關係が問題になります、今日の場合で言へば、國防力、是は絶対に定まつて居る、従つて財政力、是も租税と公債とに定まつて居る、問題は根本の經濟力、吾々國民一般の經濟力の問題であります、此國民の經濟力さへしつかりして居れば、また十分に之を充實せしめ、

之を擴充せしめて置けば、多少増税をやつても何の苦痛もない、公債を出しても國民の經濟力さへし
つかりして居れば、百億や二百億の公債を出してもグン／＼消化して何の苦痛もなくやつて行けるの
であります。其根底の經濟力が弱つて居りますと、少しの増税でもすぐそれでへこたれる、少し公
債を出しても消化力がないと云ふ關係になつて來て行詰りを來たす、寺内陸軍大臣の車中談では國民
は三十億や五十億圓の財政はビクともしない考が必要であると云ふことが今日の新聞に出て居ります
が、吾々の方から言ふと、國民の經濟力さへ擴充して居れば財政が三十億になつても五十億になつて
もやつて行ける、詰り財政の力はたゞそれだけでは多過ぎるとか、少な過ぎると云ふことは考へられ
ない、三十億は多過ぎるとか、又少な過ぎると云ふことは考へられない、國民の經濟力との關係で、
それとの相對的關係によつて、多過ぎるとか少な過ぎるとか云ふことが始めて言はれるのであります
だから假に十五億の財政に縮小しても、國民の經濟力が萎縮して居つては十五億の財政も持てない、
反對に三十億、五十億の財政になつても、國民の經濟力の方が擴充して居れば持ち續けて行くことが
出来る、そこで今日の問題として最も重要な問題は國民の經濟力、是さへ強めて置けば此の時局は困
難でないこととなる。其意味から言ふと、國防力は經濟力に依存する。經濟力の如何に依つて
國防力は結局において決定されると云ふことになると思ひます。

是は今日の時局の要求する國防は經濟に依存すると云ふことを申したのであります。第二に別の
方面から考へてもこの事は明かであります、即ち國防は要するには是は戰爭に勝つと云ふことでありま
す。戰爭には防禦的の戰爭もありませうし、攻撃的の戰爭もありませうが、何れにしても、結局は戰
争に勝つと云ふのでなければ國防は問題にならない。そこで戰爭と云ふことを考へて見ますと、そこ
に經濟の力が非常に重要であると云ふことは是はどなたも御存知の通りであります、例へば歐洲戰爭
の時に、戰爭だけの力は獨逸は非常に強かつた、獨逸は北の方では露西亞、南の方では佛蘭西の國土
の大半を占領して、戰爭の方は殆ど負けたことは少ない、ですから其方面ばかり見て居ると獨逸は決
して負けないと云ふことが最後まで考へられて居つたのであります。御存知の通り、結局において
獨逸の經濟力がグラついて來た、其爲に獨逸の敗戦となつたことは御存知の通りであります。是を見
ても、國防の結局の目的を達するには軍備——兵器、兵力も重要であることは勿論ですが、其の根本
の經濟力と云ふものが結局最後の勝敗を決するものであると云ふことさへ考へられるのであります。
外國の例を引くまでもなく、日本でもさうであります。昨年は日露戰爭三十年記念と云ふので日露
戰爭に關するいろ／＼の新聞雑誌や書物が出ましたが、其時に私は感じたのですが、やはり日露戰爭
の結果をいろ／＼考へて見ても、あの時の財政經濟と云ふことをもう一遍反省する必要があるだらう

と云ふことを考へたのであります、と云ふのは、御存知のやうに、日露戦争は陸でも海でも連戦連勝大勝利を得て、戦争と云ふ點では大勝利でありました。そこで戦争が大勝利に終つた以上は露西亞から少くとも西伯利亞位は取つてしまへ、其當時或る連中は西伯利亞まで取つてしまへ、バイカル湖まで取つてしまへと云ふやうな主張をした「バイカル博士」があつたことは御承知の通りであります、でありましたにも拘らず、結果はどうであつたかと申しますと、御存知の通り賠償金は一銭も出さないと露西亞は頑張つて、結局漸く日本は樺太の南半分を貰つて戦争は終局を告げた、それで當時國民は非常に憤慨して東京の日比谷の焼打事件が起つた、日本はこんな大勝利を得て居るのに屈辱的の講和談判はやめてしまへと云ふやうな國民の輿論であつたと思ふのですが、併しそれは唯外面だけを觀ての國民の輿論で、實際はもうあの戦争はあれ以上續けることが出来なかつたと云ふのが實情であつたさうであります、それは兵力、軍備は別として、財政經濟がもう持たなかつた、あの日露戦争は總て外債、即ち英吉利から金を借りて大部分借金でやつたのであります、高橋前大藏大臣が借りに行つたのであります、金を借りて戦争をして居つたのであります、段々英吉利の方も金を貸さなくなつて來た、之に付て本當かうソカ分りませんが斯う云ふエピソードが傳はつて居ります、段々英吉利が金を貸さないやうになつて來た、日本の方では是は非常時の非常時であります、何時でも非常時になる

と金の熱が出るものと見えまして、最近でも金山が大變な問題になつて居るやうであります、當時日本の新聞に盛に秋田縣下のどこかに巨大な金山が発見されたと云ふ大きな新聞記事が出ました、それで山縣元帥が非常に喜ばれて、もう戦争は切上げなければならんかと思つて居る際に、大金山が発見されたと云ふので非常に喜んで大藏大臣の會禰荒助氏を呼んで「秋田縣下に金山が発見された」と云ふがそれは本當かどうか」と聞かれた所が、會禰氏は笑つて答へなかつた、さうして居るうちに其新聞記事が英吉利に渡つて、英吉利の新聞が盛に日本に大金山が発見されたと云ふことを書立てた、そこで英吉利は安心して、そんなに大きな金山が発見されたのなら日本に金をウンと貸してもよからうと云ふやうなことで次の外債に應募してくれたと云ふことであります、本當かどうか分りませんが、さう云ふことが傳はる程であつたのであります、それは講和談判の状態から見ても分ると思ひます、今日から考へると樺太を皆貰つた方がよかつた、のみならず浦鹽斯德から沿海州は皆貰つて置けば今日は問題が簡單に行くのであります、それがあの時は出来なかつた、日本は小村伯が全權でポーツマスに行つて、露西亞からはウイッテ伯が來て、二人で講和談判をしたのであります、其時のウイッテ伯の日記が後に書物になつて出て居ります、それを見ますといろ／＼のことが書いてある、其中に斯う云ふことがあります、今樺太が問題になつて居るが「もう一押し日本が押し來たら樺太をや

らうと思ふ、樺太は皆やつても已むを得ない」と云ふことが書いてあるさうです。それなら何故日本がもう一押し押して樺太を全部貰つて置かなかつたかと云ふことを考へるのでありますが、それは其當時の日本の状態がもう一押しも二押しも押す餘裕がなかつた、財政經濟が火の車で、一日でも早く治めなければいかんと云ふ急迫した事情に迫つて居つたのであります、併し國民の多數は今日だからもう言つてもよろしいが、當時はさう云ふことは夢にも知らない、唯連戦連勝で沸立つて居る時であります、さう云ふ時に小村全權と當時の桂總理大臣、山縣公と云ふやうな首腦部の二三の人は、何とかして早く纏めなければならんと云ふので講和談判を結んだのであります、何も知らない國民は非常に憤慨して、小村全權を殺してしまへ、東京驛へ歸つて來たら生かしては置かんと云ふやうな情勢であつたので、政府の人々は非常に心配して、小村全權に「今歸つて來るな、一二年外國に遊んで國民の熱がさめた時分に歸つて來い」と言つてやつたのですが、小村伯は、さう云ふ場合ではないと云つて生命を賭して歸つて來た、そこで總理大臣は東京驛に迎へに行つて小村伯の首をかゝへて出て來たが幸に何事もなく濟んだと云ふ話があります、さう云ふことなどから考へて見ましても、結局は國防はやはり經濟に依存する、財政經濟の力をウンと強めて置かなければ是からの戦争は出來ないと云ふことが考へられるのであります、殊に是からの戦争、將來の戦争は尙更財政經濟の力が決定的に重

要になつて來ると思ふのであります。

私は素人ですから、よくは知りませんが、素人考でも第一に是からの戦争はすぐに世界戦争になると思ひます、従來は日清戦争、日露戦争と云ふやうに二國の戦争で済みました、是からは互に利害關係が密接になりますから、二ヶ國が戦争を始めますと其各々の國につく國が出來て來て世界戦争になる懸念が非常に強いのであります、日露戦争の時でもやはり世界全體がどちらかに味方をして居ります、表面は中立を宣言して居りますけれども、英吉利は日本に非常に好意を持つて呉れて外債に應募して呉れたと云ふこと、それから佛蘭西は露西亞を大いに援けていろ／＼のことでして居ります、其他の何れの國も中立は標榜して居りますが、實際はどちらかの味方であります、だから其意味では或る意味の世界戦争でありましたけれども、表面では日露戦争でありました、併し將來は是が表面上世界が二大陣營に分れて争ふと云ふことになり易いのであります、さう云ふことから世界戦争になつて來ると尙更此財政經濟が根本的の要素になつて來ると云ふことが考へられます、第二に將來の戦争と云ふものは決して簡單には濟まない、即ち長期の戦争になると云ふことが考へられるのであります、なか／＼半年や一年で片づく戦争とは考へられない、伊太利とエチオピアの戦争のやうなことは例外で、是からの列國の戦争と云ふものはどうしても世界全體が表面上之に参加し、而も長期、二年、三

年、五年と云ふやうな長い時間を必要とするだけの覺悟がなければならん、短時間で済めば宜しいがそれだけの覺悟が必要であると思ひます、左様に三年、五年と云ふやうな長期間になつて來ると最も決定的の要素はやはり最後は財政經濟の國民の力と云ふものが非常に重要になつて來る譯でありますそれからもう一つは將來の戰爭はどうしても科學の戰爭になると云ふ傾があります、いろ／＼新しい文明の利器、毒瓦斯、爆彈、飛行機其他の科學の戰爭になる傾向があります、だとすると、此事は直ちに經濟財政の戰爭になると云ふことです、私は素人ではありますが、飛行機が煙幕を張る、あの煙を出すのに非常に金がかゝると云ふことであります、詰り科學の戰爭は金の戰爭で、非常に金がかゝると云ふことになります、さう云ふやうに、將來の戰爭と云ふものを考へて見ますと、何れの點から考へても財政經濟の力が非常に重要な要素になつて來ると考へられるのであります、其點から言つてもやはり國防は經濟に依存する、經濟だけでよいとは決して言へませぬけれども、經濟が非常に重要な要素になつて來ると考へられるのであります。

そこで、さうだとすると、今日の時局からして日本の經濟力をウンとこゝで強めて之を擴大充實して行かなければならんと云ふことは、經濟其ものゝ爲には勿論重要であります、經濟自體の爲に重要であるのみならず、國防と云ふ見地から言つて、今日の經濟力をどうして強めて行くかと云ふことが

非常に重要な問題になつて來る譯であります。

そこで第三に日本の經濟力の強化と云ふことはどうして出来るかと云ふことに付て進んで考へて見たいと思ひます、所が幸にも今日日本の經濟は全般としては所謂躍進時代にあります、日本の經濟は昭和八年頃から非常な躍進を續けて來つゝあることは御存知の通りであります、八年、九年、十年、十一年、今年で四年になります、其間に日本の經濟は非常に躍進を遂げつゝあります。所が此躍進は非常に從來の躍進とは違つて居ります。吾國は近時において二回の躍進をして居ります、即ち歐洲戰爭當時が第一の躍進、第二が今申しました最近の躍進であります、第一回の躍進と今度の躍進を比較對照して考へますと非常に違つて居ります。第一回の躍進は國民經濟のあらゆる部面が一樣に一般的に躍進した、都市も農村も、大産業も中小産業も、あらゆる産業部面が一樣に躍進したのか第一回の躍進であります、今度の新しい躍進はそれと違ひまして、非常に偏在的に片寄つた躍進をしたと云ふのが非常な特徴であります、假に之を前の一般的躍進は正常的な、ノーマルな躍進、今度の片寄つた躍進はアブノーマルな偏在的な躍進であると云ふことが一方から言へるのであります。

此の偏在的な躍進をしたと云ふのはいろ／＼の原因があります、御存知のやうに之には大體二つの中心があります、一つは軍需工業を中心にした軍需景氣と云ふ形で躍進した、もう一つは輸出工業

を中心にした輸出景氣と云ふ形で躍進したのであつて、此二つの部面は非常に躍進して居りますが、外のものもは取残されて居ると云ふ状態であり、でありますから、今日の問題は其の偏在的の躍進を正常的の躍進に轉換すると云ふことが經濟力を現實に強める一つの方法であると云ふことになるのであります。之を具體的に申しますと、今日躍進から取残されて居る部面が二つあります、一つは中小産業の部面、是が今日の躍進から取残されて居る一つの部面であり、もう一つの部面は農村産業、是が又今日の躍進から取残されて居る他の部面であります、今日の日本の經濟の弱點、即ち弱い部分は中小産業と農村産業との二方面であります、それで此方面を現實に發展せしめ、強化せしめよう、今の強い所はそれで宜しいが、取残されて居る部分を強めて行くと云ふことが今日の問題であります。

そこで是が時局の認識と云ふことに關聯して來ます、時局の認識を經濟上から言ひますと、是は統制經濟の轉換と云ふことになるのであります、即ち從來の統制經濟は到る處に行はれて居りますけれども、その統制經濟の中には私利私益の爲に、自分の利益の爲に統制して多數の中小産業を壓迫する農村産業を壓迫する、消費大衆を壓迫すると云ふやうな統制經濟が一方に行はれて來たのでありますさう云ふ統制經濟もありますし、又他方には中小の者が組合を組織する、或は國家や、公共團體が統

制する、即ち國家が法律を制定して、例へば米穀統制法を定めて統制をやる、市役所が中央市場を造り、公設市場を造ると云ふやうな、いろ／＼の統制經濟が出來て、從來の放任經濟との間に軋轢衝突を起して混沌として居つたのが最近數年來の統制經濟の状態でありました、さう云ふ所に時局認識と云ふことが大きな力を持つて出て來て、それで今まで混沌として居つた放任經濟、統制經濟、私益統制、公益統制と云ふやうなものが時局認識の力で或る方面に向つて歸一して來つゝあると云ふのが今日の状態であります。それを吾々は統制經濟の轉換期にあると言つて居ります。

それから統制經濟がやかましく問題になる一方、之に對して非常に怯える人が出て來た、統制經濟になつたらどうなるかと心配してゐますが、併し是は全く誤解でありまして、統制經濟と別の計畫經濟とを混同して居るのであります、統制經濟でもやはり私有財産は完全に認めます、五十萬圓あつても百萬圓あつても完全に認めます、それから營利企業も認めます。だから其點では從來の放任經濟と變りません。所が次の計畫經濟になりますと、勿論私有財産は許さない、生産用の私有財産は原則として國家が沒收する、併し吾々の消費財は自由に許す、だが生産財、工場とか機械とか商店と云ふやうなものも國家が沒收することが出来る。また私人の營利企業は原則として認めない、企業は原則として國家が公營にしてしまふと云ふのが、是が計畫經濟で、即ち露西亞のやつて居る經濟が大體これ

であります、統制經濟が問題になつて來ると非常に怯えると云ふのは此計畫經濟を暗に想像して居るので、統制經濟ではさう云ふ心配はないのであります、唯從來の放任經濟と何處が違ふかと言へば、從來のやうに個人の營利活動、私利私益の爲に國民多數を犠牲にするやうなことは許されません。國家その他の團體が放埒な營利活動を外部から統制して、自由な、放埒な活動を許さない、統制して行くと云ふのが統制經濟であります、日本でも最近になつてさう云ふ意味の統制經濟の方面に進んで來た之が進んで來ると從來の經濟に對してどう云ふ關係を持つかと云ひますと、巨大資本の財閥統制、大資本のカルテル統制、斯う云ふものゝ營利統制に向つて國家がもう一つ上から統制する、さうして國民多數の利益になるやうに公益的見地から統制するやうな方向に向つて居る、だから大きな産業は成べく抑へて行く、餘り無茶をやらないやうに大きなものを統制して行く、全般の利益になるやうに大きなものを統制して行く、さう云ふことが時局に依る一つの轉換でありまして、さう云ふ所から例の電力統制問題も出て來て居るのであります、電力は果して國營がよいかどうか、少くとも從來のやり方は本當の獨占事業であります、だからそれに對しては國民多數の利益になるやうに、會社が獨占的に利益を得ることを許さないやうにしなければならんと云ふことは今日では論議の餘地はないので、其一つの現はれが電力統制になつて現はれて居るのであります、さう云ふ方面に轉換して居ると云

ふことが一つ、もう一つの方向は中小産業および農村産業と云ふものが營利統制に依つて非常に壓迫され不利益を蒙むつて居る、だからそれを今度の時局の影響で統制して、これらの弱い者を引上げて促進的に振興的に中小産業、農村産業を統制しよう、大きなものは抑へて、中小のものを引上げようさうして非常に凸凹のある最近の躍進を、凸の所を抑へて、凹の所を引上げて行かうと云ふ傾向になつて來たのであります、即ち日本の今日の弱點を矯正して全體としての經濟力を強めると云ふ方向に今向つて居るのであります。是が例へば此間の特別議會では商工中央金庫法と云ふのが通過致しましたが、是は中小商工業者の爲の法案でありまして、中小商工業者は金融力が非常に弱い、今日の低金利時代にも非常に金利の高い金を使つて居る、それで斯う云ふ中小商工業者の爲に安い資金を供給する必要があると云ふやうなことから此商工中央金庫と云ふものが考へられて居つたのであります、從來はなか／＼認められなかつた、どうしても大藏省が認めない、議會が認めないと云ふことでありましたが、二月事件後の特別議會では是が眞先に易々と認められて通過し成立したのであります。おまけに今まで五百萬圓の資金でありましたが、それでは少いからもつと増して一千萬圓にしよう云ふのでと／＼資金を一千萬圓にして是が成立したのであります、さうして是は十倍の社債が發行出來ますから實際は一億一千萬圓の資金を持つ中央金庫になるのであります、是は段々と中小産業を

振興せしめて、全體の力を強めようと云ふ一つの傾向の現はれであります、又農村に付ては、此間の特別議會では農業關係の三法案、即ち米穀自治管理法案、肥料業者統制法案、産繭處理法案、この三つの法案が通過して居ります、是も從來はなか／＼通らなかつたのですが、今度難なく通過して成立したのであります、尤も是だけではまだ／＼不十分でありましてなか／＼農村は振興しませんが、それが認められて通過したと云ふことは農村産業を振興せしめなければならんと云ふ空氣になつた爲であります。

そこで、斯様なことなどを見ますと、今日の時局の影響を受けた統制經濟と云ふものは、要するに日本全體の經濟力を正常的に健全に、之を強めようと云ふ方向にあるものであると云ふことが考へられる譯であります。

そこで之が本當に今日の政治家や内閣の諸公に分つて居るかどうかは疑問であります、私共が考へますのには、どうしても日本の經濟力を強めて國防を完全にする爲には日本獨特の經濟組織を造りあげなければならんと云ふことを考へて居るのであります、是は從來非常に間違つて居つた、吾々經濟學者も誤つて居つたのでありまして、それは從來の學問の仕方は大體外國の書物が中心になつて居りました。獨逸の書物を勉強する、佛蘭西の書物を勉強する、先づ外國の書物を先に研究すると云ふ

のが從來の學問の研究の仕方であつたのであります。外國の本を読むことは宜しいが、それだけに捉はれると結局最も近い最も大事な日本のことが見えない、日本の經濟が現實に見えないと云ふ缺陷があつて今日まで經濟學者も誤つて居つたのであります。

それはいろ／＼の點から考へられますが、私共經濟の方から考へまして日本は非常に根本的に斯う云ふ二つの點が外國と違つて居る。一つは經濟に於ても日本では國家主義が非常に力が強いと云ふこと、詰り經濟界の人々、實業家でも、産業家でも、國家に對しては經濟的の自己の利益を犠牲にしてもやると云ふ考が經濟界の人に非常に強いと云ふことであります、是が外國の産業と非常に違ふ點であります。日本にもいろ／＼の人が居りますから或はさうでない人も居るかも知れませんが、一般的に言へばさうであります、例へば戰爭が起つたとすると、外國で戰爭が起つた場合に第一に起る現象は何であるかと言へば、各人が自分の懷ろを心配することであり、日本では其點が違ひます、戰爭が起つた、此戰爭に勝つか負けるか、何としても勝たなければいかんと云ふのが日本人の感じであります。所が西洋人の多くの人はさうでないのであります、戰爭が起つた、自分の懷ろはどうなるかと云ふことを先づ第一に考へて兌換券を心配する、果して之が値打を持ち續けて行くのかどうか、下がつて價值が無くなるのではないかと云ふことを第一に心配する、そこで戰爭が始まりさうになると

すぐに中央銀行に國民が殺到する。紙幣を現金に換へてそれを握つて居らなければ安心が出来ないと云ふのが外國人であります。だから外國では戦争が始まると直ちに兌換を停止します。さうしなければ戦争が出来ないので、併ながら日本では未だ會つてさう云ふことは経験が無いのであります。日清戦争の時でも、日露戦争の時でも兌換をすると云ふ非國民は一人も居りません。國家を絶対に信ずる、日本銀行は兌換を停止しない、門戸開放であるが誰も兌換には來ない、今日兌換を停止して居りますが是は戦争の爲ではない。外の理由から兌換を停止して居るのであります。さう云ふ點などを考へて見ましても、日本は經濟の方に於てもやはり國家主義が盛であります。國の爲には全財産を投出して構はんと云ふ考が何處かに在ると云ふのが是が外國と非常に違ふ點であると思ふのであります。第二に違ふ點は日本には家族主義が行はれて居ると云ふことが、經濟上から觀て非常に違ふ點であります。家族が一つの生活體になつて居つて、其家族に屬するものは全部一體である、主人が儲けた金は勿論全部其家族の生活の爲にぶち込む、子供が働いて儲けて來た金も全部ぶち込む、又おかみさんは煙草屋をやつて儲けた金も全部其生活にぶち込む、斯様にして一つの家族が一つの經濟を營んで居ると云ふ點であります。是が日本の經濟上に非常に強い一つの原因であります。と云ふことは極く卑近な一例を申しますと、日本人が非常に安く働く、それでよく生活をやつて行くと云ふ一つの原

因は、三人なり五人の人が寄つて一つの家族を造つて居る、各々が働く、主人が會社で月給を貰つて來る、子供は役所に行く、娘はデパートで働く、おかみさんは内で小賣をやる。其各々が獨立して居つてはそれだけでは生活が出来ない収入であつても、それを三人なり五人持ち寄つて生活するから容易にやつて行けるのであります。大阪あたりの工場などを見るとさう云ふのがよくあります。主人の月給だけではなかくやつて行けさうにない家族でも立派にやつて居る、と云ふのは家族が一つの經濟になつて一つの計算に於て共同してやつて居るからである、所が是が又外國には非常に少いのです。其點が日本の經濟上の一つの特長であると思ひます。

此の國家主義と家族主義の二つが根底になりまして純粹に經濟上違つた點が二つ出て來ます、其外にまだあるかも知れませんが、今日私が自信を持つて言ひ得ることが二つあるのであります。

それは此點も外國と非常に違ふ點であります。外國の經濟の本を讀んで居りますと斯う云ふことがあります。それは今の資本主義の發展するに従つて一國の商工業が益々繁榮して農業は潰れてしまふ、結局英吉利などのやうに農村は無くなつて、商業工業が盛になつて國民の食糧品、原料品は國內では供給が出来なくなる、全部外國から輸入して商工業をやつて行く様になると云ふ理論であります。現に英吉利はさうなつて居ります。國民のたつた八%が農村に残つて居るだけで、昔は立派な田であ

り畑でありましたものが、すっかり草だらけになつて、牛が遊んで居る、さう云ふ風に、段々資本主義經濟が發展して來ると農業は衰退するものである、さう云ふやうに西洋の經濟理論は教へて居るのであります、さう云ふ西洋の本を讀んで、日本にも其まゝそれが行はれて行くものであると云ふ風に考へて、商工立國とかなんとか言つて、日本は商工業さへやつて居ればよいと云ふ説はそこから來て居るのであります。

所が段々日本の事情を調べて見ると、日本は西洋とは全く事情が違つて居る。全く違つた進み方をして居ると云ふことが分つて來たのであります、例へば明治初年には日本の輸入品中食糧品が三〇%でありましたが、是が段々と英吉利のやうになつて行くとすれば食糧品が足らなくなつて、今日では日本の食糧品、原料品は殆ど全部を輸入しなければならん筈でありますのに、實際は逆に進んで居ります、今日では日本の輸入品中ただの八%が食糧品で、それも葡萄酒とかウイスキーとかブランドーと云ふやうな贅澤品でありまして、必要食糧品は全く自給自足が出來てゐます、是が日本獨特の進み方をして來た點であります。別の言葉で言ふと、今日日本は資本主義が發展して資本主義の爛熟期とまで言はれて居るのに、農村は潰れるどころではない、日本の五〇%は農民であります、此點が非常に違つて居る點であり、同時に日本が非常に強いと云ふ點であります、國防、軍備、兵力と云ふ點か

ら言つてもさうであります、農民でなければ本當の戦争は出來ないと言はれる位で、經濟上から言つても日本に半分の農村が残つて居ると云ふことは日本全體の商工業に取つてどれだけ強味であるか分らない、日本の商工業が強いと云ふことは半分農村がある爲である、此ことは吾々が今までうつつかりして居つたのであります、最近漸くはつきり分つて來たのであります。

それで斯う云ふ状態を維持して行つたならば經濟的に世界何處の國と戦つても決して負けない、と云ふのは、日本の綿業、紡績業、人絹業、羊毛業と云ふものは大規模で、何千人と云ふやうな大工業で、斯う云ふものは元來外國から輸入したものであります。もとは英吉利などから輸入して居つたものであるが、今日は殆ど日本が世界の先進國を凌駕して、人絹にしても、綿業にしても、最近では羊毛業でも非常に發展して來まして、此調子で行けば日本は羊毛工業に於ても世界を壓倒すると云ふやうな形勢が見えて居る位であります、日本は纖維工業が最も得意でありまして、纖維工業の中で最も古いのが生糸であります、生糸は天照大神の神代から始まつて今日益々發展して居る、紡績はすつと最近であります、人絹も最近十年間程の間に亞米利加を殆ど凌駕して今や世界一と云ふ所まで發展して居ります、其次の羊毛、毛織物、是は全部輸入して居つたのであります、最近では段々國産が出來て來て、反對に毛織物が外國に出て行くやうになりました、此調子で行けば、羊毛工業も近く世界

を壓倒して日本が覇を唱へる時代が近き將來に來ると思ひます、御承知の通り毛織物は昔から外國特有の産業でありましたので、其毛織物工業に日本が進出して行くものですから、是ではいかんと云ふ所から、元來英吉利人は遠い先のことを考へますから、あの濠洲の問題はそこから來て居るのであります、日本の羊毛工業を發展せしめない爲には羊毛さへ日本へやらなかつたらよい。今の間に芽を摘んでおかなければ英吉利は最後の毛織物まで日本に取りられてしまふと云ふやうな考が原因になつてあの日濠問題と云ふのが今日起つて居る譯であります、さう云ふ風に日本の大規模工業が非常に強いと云ふことは、一つは農村が半分残つて居ると云ふことが大なる原因であります、日本では農村から非常に豊富な安い労働力が入替り立替り出て來て呉れる、出て來て二三年しては歸つて嫁入する、又新しいのが出て來る、斷へず新陳代謝が極めて都合好く行はれて居る、是は半分農村があるからであつて、さう云ふことが行はれると云ふことは非常に安くて能率のよい労働があると云ふことであります。今までは熟練労働と云つて五年も十年も永らくやつて居れば居る程能率はよいと考へて居つたのでありますけれども、最近ではさうでない。田舎から始めて出て來て三ヶ月もやれば熟練工になれます、それからあとは何年やつても熟練の程度は進まないで反對に五年も十年もやつて居ると能率が下がつてしまふ、能率は下がつても月給は上げてやらなければならん、だから二三年でやめて歸つて嫁

入して又新しいのが來る方がよいのです、所が英吉利ではさう云ふことがありません、農村がありませんから、昔田舎から出て來たらそれきりです、家族全體が都會生活をして居りますから生活程度が高い、従つて賃銀を上げなければならん、そこに労働組合のやうなものが出て來ていろ／＼の運動を行ふ、それが詰り資本主義の行詰りです、要するに、資本主義が行詰つたと云ふ根本はそこにあるのであります、我が日本に於て此行詰つた資本主義の轍を踏まないやうに獨特の發展をしようと云ふ爲には農村を半分残して置く、之を何とかして今後維持して行かなければならん、と云ふことが考へられる、此ことは又先程申上げました今日の統制經濟の一つが農村産業に向つて居ると云ふこと、一致する譯であります、日本獨特の産業組織の根底はそこにある、其根底の上に經濟が立つて行けば大丈夫な經濟が出来る、是が今日の經濟力を強化する一つの部面であります。

もう一つ經濟の日本獨特の優秀な點は、是も亦外國と違ふ點でありまして、外國の經濟の本を見ますと、段々資本主義發展の爲に大規模になつて、中小の者は結局潰れてしまふと云ふ法則、之を經濟學の方では企業集中の法則と言つて居ります、結局は一つの大規模企業になつてしまふと云ふのであります。さう云ふことが經濟學の本に書いてある、さうして日本を觀ると、日本にも成程一部にはさう云ふものが確かにあります。例へば紡績の如きは昔は小さい糸曳車で家庭でやつて居つたのが今日

は大規模の大産業になつて來た、或は銀行の如きも段々今日では大きくなつて行きつゝある、或は又小賣店と云ふものは段々百貨店と云ふ大きなものが出て來て益々それが繁榮して居ると云ふやうに、日本でも一部にはさう云ふものがたしかに行はれて居ります、そこで人々を誤らすのです。即ち西洋の本に書いてある通り、日本も必ず西洋の通りに行くんだ、大規模、大工業、さう云ふ風に行くのだと考へて居つたのですが、是は大なる誤であります、即ち第二の特色は日本では中小産業が非常に重要性を持つて居る、決して是は大規模、大産業に壓迫されないのではありません、是が第二の特長であります、それは日本はまだ進まないから中小産業が残つて居るのである、資本主義が進んで行つたならば結局中小産業は滅亡するのではないかと云ふ人もありますが、さう云ふことは言へないと思ひます今日の日本の資本主義は殆ど爛熟期に達して居ると言はれる程進んで居る、然るに中小産業は依然として重要性を持つて残つて居ると云ふのが日本の一つの特異性であり、是が又同時に日本の優秀性を物語つて居るのであります、世界の經濟に負けなないと云ふ一つの優秀性は中小産業が残つて居ると云ふ點であります、日本の商品は今日世界的に進出して居りますが、其商品は日本の何處で造つて居るかと云ふと大部分は中小産業の産物であります、だから日本の商品が何處に行つても負けなないと云ふのは、言換へると中小産業が非常に強いのだ、是があるから世界の産業に負けなないと云ふ一つの

證據であります、日本の中小産業を振興的に活かしてそこに日本獨特の産業組織を樹てたならば決して外國に負けな、諸外國では大體大規模大産業になつて來て居ります。

一つの面白い例として最近起つた問題であります、此頃流行して居るファッスナー、財布の口などによく使つて居りますが、鎖のやうになつて居つて一方から引張れば締まり、一方から引張れば開くと云ふ、あの口金が問題になつて居ります。何故問題になつて居るかと云ふと、是は元來亞米利加に出來たもので、亞米利加であれを造る機械を發明して機械で造つて居るのであります、初は亞米利加で發明して大規模に造つて日本へそれを輸入して居つたので値段も非常に高かつた、所があれを一つ日本でも造らうと云ふので亞米利加へ機械を買ひに行つた、所が是はパテントになつて居つて、何百萬圓と云ふ金でなければ賣つて呉れない、そこで是は一つ日本で考へてやらうと云ふので大阪あたりの人が考へだして、其結果日本では高い機械は買はないで手先であれを組んで造ることになつた、日本ではあれは手工業としてやつて居ります、どう云ふ仕組になつて居るのか素人には一寸考へても分りませんが、あれを日本では手でやつて居ります、亞米利加では機械でやつて居るが日本では手でやつて居つて、其結果はどうかと云ふと亞米利加の三分の一の價格で出來るのです、最近盛に生産されて逆に三分の一の値段で亞米利加へ輸出して居ります、亞米利加では非常に困りまして、何とかし

て日本品を防がなければならんと云ふので日本品を壓迫して高い關稅をかけて來ました、關稅も少々の關稅なら構はないのですが、もう一つ關稅で止まらなかつたら數量割當と云ふのをやつて、日本から例へば百萬ダースしか買はないと云ふやうに數で定めて制限する、さうすると出て行けなくなる。それが問題で今日本の外務省と亞米利加の間にやかましく交渉をやつて居ります。

さう云ふことから考へても分る通り、日本には中小工業が澤山ある、又是が日本の國民性に適して居る、いろ／＼の事情で中小工業で十分に存続できると云ふ理論的の根據が日本にあるのです、其一つは最近やかましく言はれて居ります電力の問題であります、昔は機械を動かすのには石炭を焚いてステイム・エンチンを動かして居つたので、さう云ふ時代には大規模大工業でなければ採算が合はなかつた、さう云ふ時代に出來た經濟學の理論は、段々中小工業は大規模大工業になつてしまふと云ふ法則が出來て居つた、それは其時代の經濟學の法則であります、所が電力革命が起つて最近ステイム・エンチンと云ふものは問題にならない、電力をモーターに使ふと云ふことになる小さいモーターで十分動かせる、半馬力、一馬力、二馬力と云ふやうなものでも動かせるのです。

此頃いろ／＼の學者がさう云ふことを言ひ出しましたが私は三四年前いろ／＼研究した結果これを發見した、即ち米の研究をして居る時に發見した。米の精米の過程がやはり昔はステイム・エンチ

ンで大きな精米工場で何百と云ふ臼を据えてやつて居つたものでありまして、京都にも澤山あつたと思ひます、明治四十年頃には澤山の精米會社が出來て方々で大規模にやつて居つた、所が其後の様子を見るとさう云ふ大規模の會社は全部潰れて、今日は精米は小賣屋が庭の隅でゴツ／＼やつて居る、即ち精米過程は却つて大規模から小規模になつて來た譯であります、それは何故かと云ふと電力の關係であります、ステイムではさう云ふことは出來なかつたが電力になつてから小さい工場で十分出來るやうになつた、電力の爲に中小工業でも決して大工業に負けない、それが又日本に非常に都合のよいと云ふことは、日本は電力が世界第一、第二と言はれる程豊富な國であります、外國へ行つた人は御存知であります、英吉利などは今日でも田舎へ行けばランプで生活して居る所が澤山あります、田舎だけではない、倫敦の眞中でも私の下宿して居つた所は電氣の無い家庭でありました、夜は蠟燭で便所に行きます、日本では便所の中でも風呂場でも電氣がついて居ると云ふ程、電氣の豊富な國であります、其電力が豊富であると云ふことが日本の中小産業の有利な所以であります、所が其電力を營利會社が獨占的にやつて居ると安く行かないかも知れない、殊に大きな所には澤山使ふから安く賣り小さい所には安く賣らない、小さい所は少ししか使はないから高く買つて賣はなければならんと云ふのであります、所が中小産業を盛にする爲には電力を安く豊富に供給する、殊に農村山村の工業の

爲には豊富に電力をやらなければならん、それには電力は國家が統制して、國營にするとか何等かの形で統制して安い電力を豊富に供給する、さうすると中小産業が盛になつて来る、それに依つて世界に對抗すると云ふ譯であります。

其外にもいろいろありますが、もう一つは日本の國民性が中小産業に適して居ると云ふことであります、と云ふのは日本の國民程手先の器用な國民はない、殊に婦人の手先は機械と競争して負けないほど器用であります、此手先の器用であると云ふことは勿論大規模大工業でも必要であります、中小工業になると殊に手先の器用なことが有利になつて來ます、斯う云ふ國民は世界各國他に居らないので、其器用な手先を利用してやつて行けば決して負けない、所がまた手先が器用であると云ふことは別の方から言ふと頭が器用であると云ふことであります、是も外國へ行つた人は御承知であります、日本人ほど頭の器用な國民はない、頭の轉換が非常に早い、是が日本人の特色であります、日本人は話をしても十のことは三か四聞けばすぐ分る、詳しく言ふ必要はない、西洋人は十まで話してしまはなければ察しをすることが出來ない、是は日本人の一つの特長であります、同時に又西洋人の頭の違ふ點は一つのことを何時までも考へ通すと云ふことであります、此點は日本人も考へなければならんと思ひますが、兎に角、器用な頭であると云ふことは疑ひのない事實であります、西洋人のやう

に何處までも考へ通すやうな頭がよいか、日本人のやうに器用な頭がよいかどちらがよいか是は簡単に言はれません、頭の型が違ふので、吾々のやうに研究をしたり學者になつたりするには器用な頭は要りません、一つの事を何時までも考へ抜くやうな型の方が學者には向きます。だからどちらがよいか悪いかと云ふことは簡單には斷定出來ません、併し中小産業經營と云ふ立場から言ふと頭を器用に轉換しなければならん、大規模のものは頭も應揚に構へて居ればよろしいが、中小のものは臨機應變にいろいろ轉換して、やりくりして經營して行くと云ふやうに頭が器用に働かなければならん其點では日本人は獨特の頭を持つて居ります、それが日本に中小産業が残つて居ると云ふ一つの理由になり、同時に優れて居る點であります。

斯様に中小産業と農村産業、是が日本の世界各國と違つて居る特異點であり、同時に世界各國に優れて居る點であります、此特異點を強めて行き、擴充して行くならば、日本は今日の時局から觀た國防の根柢としての經濟を強化することが出來る。經濟力を強めて置けば三十億の財政でも五十億の財政でも大丈夫やつて行ける。唯問題は次に申上げますが、さう云ふやうに澤山物を造つたら何處に賣りに持つて行くか、農村産業、中小産業を興して物を造つてそれを何處に持つて行つて賣るかと云ふ市場の問題であります。

それは結局貿易を盛にしなければならんと云ふことに歸着する。所が貿易を盛にすれば國內はそれでよいが萬一の場合世界戦争が起つたら困るではないか、貿易によつて國を膨脹させて置いては萬一貿易が杜絶した場合に直ちに困るではないかと云ふやうに考へる人がありますが、それは誤解であります、平時に於て國民の生産力を膨脹さして置けば戦争の場合には永く國民經濟を運用出來て行くに云ふ基礎になります、生産力を膨脹させ、國民經濟の基礎が擴大して居れば、萬一戦争になつた場合にはそれが軍需品其他に轉換出來ますが、平時に小さく縮こまつて居つては膨脹することはむづかしい、膨脹さして置いて之を轉換することは極めて簡單であります、唯問題になるのはその轉換の問題であります。即ち戦時經濟の問題でありますが、是は日本の一つの缺陷でありまして、戦時經濟の研究が殆ど行はれて居らない。從來の經濟學から言ふと、戦時と云ふのは一時的の異常時でありますからさう云ふ研究は殆ど行はれて居らない。今まで經濟は平時、戦争でない時の經濟の運営と云ふことを中心に考へて居つて、全く戦時の方は疎かにして居つた、軍部の方でも兵力、國防と云ふ方面が中心で非常に研究は出來て居りませうけれども、國民經濟を戦時にどう云ふ風に運営して行くかと云ふ研究は十分に出來て居らない、是が今日の缺陷であると思ひます、是から大いに研究しなければならぬ問題であります、國民經濟を戦時にどうするか、其研究が出來て居らない、此間取引所の立會停止

問題が起りましたが、全く根も葉もないことが新聞に出た爲にそれですぐに取引所の場が立たん、そんなことではいかん、今日のやうに發展した經濟を戦時にどう轉換するか、是が一つの問題であります、無論いよく戦争になつたならば戦争の遂行、軍需品の調達と云ふ部分の研究は出來て居りますが、さうでない一般の經濟を戦時に於てどう云ふ風に運営して行くか、戦争が三年續くか五年續くか分らんが、其間の戦時經濟の運営と云ふ部分の研究が出來て居らない、第三には戦争が済んでから戦時から平時經濟への轉換、是が亦むづかしい問題であります、歐洲大戰の時の經驗から言ふと、平時より戦時への轉換は先づ全體が緊張して居つたから戦時だけは悪性インフレも起らずに済んだのですが、戦時より平時への轉換を誤まつた爲に今日まで十年以上も續いて非常な混亂を來たし經濟が衰へて居ると云ふ結果になつたので、悪性インフレもそこから來て居るのであります。戦時から如何にして平時へ引戻すか、之を誤まつた爲に紙幣が紙屑になつて、壁や屏風に貼られるやうになつた、そんなことは何故起つたかと云ふと戦争の爲に起つたのではない、戦時より平時への轉換を誤まつた爲に起つたのであります、此三つの方面の經濟の研究がなか／＼出來て居らない、日本でもさうでありまして、二十七八年の日清戦争はうまく行つて日本が勝つてよかつたのです、が戦後を誤まつた爲に三十年には一つの恐慌がやつて來た、それから日露戦争も二十七八年の戦時はよかつたのですが其後が

悪かつた、四十年になつて大恐慌がやつて来た、又最近では歐洲戦争の時に戦争中は非常に好景氣でありましたが大正九年の三月に大恐慌が来た、さう云ふやうに戦争がある毎に、明治三十年、四十年大正九年と云ふやうに恐慌でやつつけられたと云ふのは、即ち戦時から平時への轉換がうまく行かなかつた爲であります、其意味から言つて戦時經濟の研究は非常に重要であると思ふのであります、是れで大體前半のお話が終つたのであります、即ち國防は經濟に依存すると云ふ第一命題は終つたのであります、次の問題は經濟は國防に依存すると云ふ第二の命題でありますが暫く休憩致します。

以上に申上げました點は國防力の充實には結局するところ經濟力が重要な要素である。即ち國防は經濟に依存すると云ふことを申上げたのであります、併し是は別に私から言はずとも多くの人の常識でも明かに分つて居ることであり、第二に是から申述べようと思ひます點、即ち經濟は國防に依存すると云ふ點は是は多くの人の常識では今までは餘り認められて居らない、即ち從來の常識では斯う云ふ考が強い、國防を盛にする、軍事費を増すと云ふことは經濟を壓迫する、だから國防費と産業費は或る程度の調和を保つて行かなければならん、さうして國防費に出してしまつて、産業費を取つてしまつて經濟を壓迫されるから困ると云ふやうな調和説などが出て来る譯であります、所が私の考へではさうでない、經濟は國防に依存する、經濟の發展は國防によつて定まる斯う云ふのであります

先づ第一に申上げようと思ひますのは、資本主義經濟の發展と軍事費、國防費との關係であります此點では從來の考即ち國防は經濟を壓迫すると云ふ考は從來は間違でなかつたと言へる、即ち經濟の發達の幼稚な時代ではさう云ふことも眞理であつたと言へる、即ち資本主義の最初の時代には生産力は非常に發展して居らない、生産力は非常に弱い、其生産力の弱い時に其大部分を取つて軍備を擴張すると云ふことになれば、それは生産力を壓迫する、軍事費や國防費に非常に多く取つて行けば一國の勞働も其方に使はれるので肝心の生産力が壓迫されると云ふことは事實であります、即ち生産力不足の時代、資本主義發達の前期に於て生産力の不足の時代にはさう云ふことも或は言へるかも知れませんけれども、今日は生産力が非常に發展して來て居る、生産力の發展につれて今日では生産力過剰の時代であります、生産力は多過ぎる、足りないのは生産力に對する購買力不足の時代であります、生産力は過剰であるが購買力が不足して、幾らでも物を造る力はあるが、さて賣らうとすると賣れない、買ふ力が無いと云ふのが今日の經濟の行詰りである、資本主義が行詰ると云ふ一つの點は、生産力は益々増大するに拘らず購買力が不足する、そこで物を造つても賣れない、それで恐慌になり不景氣が続く、そこで資本主義が行詰つたと云ふことが考へられて來る、さう云ふ資本主義の行詰りを打開して經濟の躍進をするには購買力をどうして増大するかと云ふことが問題になつて來るのであります

す、だから今日の生産力が非常に多過ぎる、生産力過剰の時代には其生産力の一部を割いて國防費に充てる、今日は資本が剩つて居る、資本は銀行に喰つて居る、低金利であると云ふ時に、剩つた資本を以て軍事費を擴張すると云ふことは決して經濟の壓迫にはならない、又勞働力が剩つて、失業者が多いと云ふ時には此剩つた勞働力を以て國防費の充實に充てると云ふことは決して經濟を壓迫しない、壓迫しないのみならず、寧ろ其ことが經濟の行詰りの打開になるのであります。

それで國防の充實と云ふことは經濟を壓迫しないのみならず、其行詰りを打開することになると云ふ譯は、詰り今日の購買力の不足した時代には、この購買力と云ふことに問題なる譯であります、段々資本主義が發展して經濟が行詰つて來ると購買力を何處からどう云ふ風に出して來るか、と云ふことが問題になるのであります、日本について言へば世界戦争頃に日本の經濟が大躍進をしました、其當時起つた購買力は、階級的購買力と云ふのが先づ起つた、國民の高級階級、富裕階級が先づ購買力を發揮して物を盛に買ふ、之を假に階級的購買力と言つて居りますが、一部の富裕階級がさう云ふ風に階級的購買力を發揮すると、いろ／＼な社會問題が起つて來る、戦後に所謂社會問題がやかましくなつて來た其一つは富裕階級の購買力が原因したのみならず其購買力は非常に少い、幾ら物を買つても少數であるから國民經濟全體の打開にはならない、其點から言ふと第二の購買力、國民全般の國

民的購買力、是がウンと出て來れば經濟の行詰りが打開出来るのであります、併し是はなか／＼容易なことではない、國民全般にどうして購買力をつけるかと云ふことは非常にむつかしい問題であります、それは結局仕事を與へることに依つて、賃銀を拂ふ、給料を拂ふ、それで物を買はすと云ふことよりない譯であります、それが世界大戰後恐慌時代に考へられて問題になつたことであります、それも十分出來なくて、日本では昭和五年六月と云ふ非常な不況恐慌時代が來た譯であります、所が其後先程言つたやうに、昭和七八年から今日の日本の躍進が起つて來た、此現在の躍進は何處から來たかと云ふと、購買力と云ふ點から見ると二つの方面から購買力が出て來た、其一つは外國の購買力が出て來た、其爲に輸出が猛烈になつて輸出景氣になつた、それが躍進の一つの部面になつたと云ふことは前に申上げました、もう一つの購買力が出て來たのが是から申述べようと云ふ點で、之を私は假に軍備購買力と言つて居るのであります、即ち滿洲事變を契機として非常時が起つて、莫大な非常時豫算が成立して、非常時豫算で軍備を擴充することになつて、そこから軍備購買力と云ふものが猛烈に起つて來た、是が日本の躍進の一方の中心になつた、即ち軍需工業中心の軍需景氣、是が一方の支柱になつたと云ふことを申上げましたが、此ことは即ち軍備購買力が出て來てそれが最近の躍進をなして居ると云ふことになるのであります、だから此點最近の日本の經驗から言つても經濟は國防に依

存する、經濟の發展躍進と云ふことは國防によつて出来ることと云ふことは今日の日本に於ける事實であります。

そこで此軍備購買力と云ふもの、是が私の考では非常に面白い一つの役目を果して居ると思ふ、大體日本の資本主義の發展と云ふものを見ましても、日本の資本主義は躍進的に發展して來て居る、飛躍的に發展して來て居りますが、其飛躍と云ふものは何に依つて起つたかと言ふと是は總て戰時經濟に依つて起つて居る、最初の日本の景氣は西南戰爭後の景氣であります、そこで私の言葉で言ふと日本の經濟は國防に依存して居る、是は國防と言へるかどうかわりませんが、兎に角西南戰爭に依つて躍進したので、あれが日本最初の好景氣であります、其次が日清戰爭、是で又躍進を続け、日露戰爭で躍進を続け、最後に世界戰爭で大躍進を遂げたと云ふやうに、日本の經濟の躍進は總て戰爭で躍進して來たと云ふことは、別の言葉で言ふと軍備購買力と云ふ一つの大きな力で以て日本が躍進して來たと云ふことになる譯であります、此軍備購買力と云ふのが非常に面白いのは、いろいろ特徴がありますが、一つ非常に違ひますのは軍備購買力と云ふのが出て來ても、軍備に依つては商品が生産されない、是が一つの特徴であり、經濟の行詰りを打開出来る理論的根據であります、と云ふのは、外の産業の購買力が出て來ると、それは盛にそこに新しい商品が出て來る、今までの理論では、ドン／＼

物を造ると云ふことは非常によいことだと考へられて居りますが、生産力過剰で商品が剩つて居る時代では、さうでなくても物が剩つて居る所に盛に物を造つて、それで購買力が増して來なかつたら益々行詰りを強めることになる。併し軍備購買力は幾ら出て來ても商品が一つも出て來ないと云ふのであります、是は同じ理屈が失業對策などにも用ゐられます、不景氣で失業者がドン／＼出來る、其時にさう云ふ失業者を工場に入れて物を造つたならば、ます／＼物が過剰になり不景氣になつて失業對策にはならない、それで失業對策は多くの商品が出て來ないやうに、例へば土木事業を興す、幾ら人を使つてセメントを買ひ、砂を買つても、そこから物は出て來ないから失業對策には土木事業に限る例へば鴨川の改修などは其意味に於ては經濟打開力が非常に強い、さう云ふ意味で軍備購買力は經濟の行詰つた時に、生産過剰、商品過剰の時には非常に打開力を持つて來ます、日本では行詰る毎に軍備購買力が出て來て行詰りを打開して其時ごとに飛躍をしながら今日まで來て居る、それが一つであります。

もう一つの點は、軍備購買力と云ふのは元來其ものが購買力を持たない、外から貸付けて出て來た購買力である、之を私は貸付購買力と言つて居りますが、之が非常に面白いのは、世界戰爭までの外國に於きましては段々資本主義が發展すると資本が剩つて、金が剩つて困る、さう云ふ場合には其金

を外國に貸付けます。自分の國に物が澤山剩つて居るから外國に盛に賣りたいけれども、外國に購買力がないから買ひに來ない、さう云ふ時に購買力を貸付けてやるから其貸付けた購買力で以て買ひに來い、さう云ふことになる。と諸外國は其貸付けた購買力で物を買ふ、だからこちらの國は金を貸付ける、其金で物を買ひに來るので、商品もはけて行き、貸付けた資本に對しては利子を利得し、商品に對しては、商品の賣上げに依つて利潤する、利子と利潤と二重の利益を得て、行詰りが打開出來て資本主義は發展したのであります、英吉利は其方法で今日までやつて來て居ります、其貸付けたのが植民地の印度、亞弗利加、加奈陀、濠太刺利となつて今日になつたのが英吉利であります、これと軍備購買力とは餘程よく似た性質をもつてゐて、一は外に貸付けるが、一は内に貸付ける丈の相違であります。何れにせよ今日までの經濟の躍進にとつては却つて國防の充實と云ふことがモーメントになつて躍進を續けて來て居ると云ふことが言へるのであります。

所が將來日本が躍進して行く上に於て將來の日本の經濟の躍進と國防と云ふものは又どう云ふ關係に在るか考へて見たいと思ひます、現在の日本の躍進が果して將來何時までも續くものかどうかと云ふことが問題であります、其中の一つ、即ち軍需工業を中心にした軍需工業の躍進、是は言ふまでもなく非常な躍進をします、即ち國防力が充實し、軍備が充實することになると軍需工業は益々盛に

なる、軍需景氣はよくなる、是は明かであります、だから軍需關係の株でも買つて置けば當分は間違がない、現に其方は段々上げて來て居ります、所が一國全體から見ると是だけではやはり堅實な經濟の發展にはならない、と云ふのは之は非常に偏在する、軍需工業だけの景氣が出れば非常に偏在するおまけに軍需工業の特徴は一般的に言ふとやはり大産業であります、政府も軍部もいろ／＼お考へになつて、成べく小さい所に注文して、中小産業、農村産業を盛にしようとして居られますが、一般の本來の性質は大規模大工場のものが多いのであります、それでありませうから、其方ばかり盛に發展すると大きな所だけが益々大きく發展するが、中小のものはいけないと云ふことになります、もう一つは軍需景氣が發展すると、貿易關係がそれだけならば悪い、即ち軍需品は國產主義で行けますけれども、鐵とか石油などは輸入が大部分ですから、今は輸出景氣が出て居りますが、此輸出が止つてしまつたならば非常な入超關係になります、其ことから又經濟が悪くなる。もう一つの方の輸出工業を中心とした輸出景氣が果して是がどう云ふ風になるかと云ふことがそれに關聯して重要な問題であります、此輸出の方は殆ど中小産業の産物であります、中小産業の生産した物が出ます、だから輸出景氣が続けば中小の者が振ふのです、農村は貿易とは關係無いやうに思ひますけれども、事實はさうでないのです、農村或は山村と云ふものは貿易と非常に密接な關係があります、例へば昨日私は丹波に

参りましたが、山奥のあんな所になんて日本の貿易と関係があるものかと誰でも考へますが、あゝ云ふ所でも非常に関係があるのです、それは木材ですが、以前には米材がドン／＼入つて来て居つたので、丹波の山奥の學校でも亞米利加の材木で建つて居ると云ふやうな状態でありました、段々さう云ふ状態が続けば山村は輸入木材に壓迫されます、所が今日のやうな躍進時代になると、爲替が下がつた爲に米材が來なくなつた、最近では米材が餘り來なくなつたから丹波の山村もいゝ景氣になつたさうでありまして、あゝ云ふ所でも貿易と密接な関係があります、農村でもさうでありまして、農村が最近困つて居る原因は繭が下がつたこととあります、繭が下がつたと云ふことは生糸の輸出が振はないと云ふことでありまして、農村窮乏の一原因はやはり貿易から來て居ります、さう云ふ譯で、貿易關係、輸出工業中心の輸出景氣と云ふものは中小産業、日本獨特の經濟組織を振興さす點に密接な關係を持つて居るのであります、日本の弱い所を強めて、平均的に堅實に經濟力を強める爲には非常に重要なものであると云ふことが分るのであります。

そこで貿易の將來はどうなるかと云ふことでありますが、今までは是は大丈夫だと云ふ樂觀論が勝利を占めて居つた、それは何故かと云ふと、今、日本が商品が出て居る直接の原因は三つある、即ち日本は貸銀が外國より安い、是は大きな原因にはならないが一つの原因である、それから次は技術の

進歩、經營の合理化、能率の増進と云ふやうな經濟力が強くなつたと云ふことが一つ、第三には爲替の原因で増進して居るのであります、斯う云ふ原因は是からどうなるかと云ふと、是は其儘に維持出来る。日本の商品の進出する原因は餘りにさう弱くならないで維持出来る、例へば爲替が最も問題であります、之が四十弗、五十弗と上がったならば輸出は止まつてしまひます、所が今日の形勢では爲替は上の方を向いて居ると云ふよりは下向きの傾向が強いのであります、物價と逆です、今日では物價は上に向はふとして居る、それを抑へて居る、決して物價は下向いて居らない、物價と爲替相場とは丁度逆に行くので、爲替は今日の傾向では上がらうと云ふ傾向はない、下がると云ふ傾向が強いのです、是は日本の最近の時局の影響、即ち國防の充實、財政の強化、赤字公債の發行と云ふやうな原因からであります、斯う云ふ原因は爲替を弱くします、従來は爲替は高い程いゝと考へて居つたのですが、最近ではさう云ふことは間違ひでありまして、爲替を低くして置く、尤も餘り爲替が下がつて二十弗から十弗、五弗となつては悪性インフレになります、さう下がる心配はない、今日は精々二十五弗か二十弗位まで爲替が下がつて呉れゝば理想的で、それより下がる心配は殆どありません、其點は非常にいゝのですが、斯様に輸出の總ての條件が備はつて居るので、其點から言ふとまだく進出力は非常にあります、即ち經濟的の力では日本の商品は世界を席捲するだけの力を具へて居るの

であります、それを見て居ると、貿易の前途と云ふものは決して悲観する必要はない、樂觀してよいと考へて居つたのであります。

所がそれが今年になると必ずしもさう樂觀出來ないと云ふことになつて來たのです、それは詰りどろ云ふことかと言ひますと、今まで言ひました三つの原因は皆昔の通りであつて依然として力強いものであるが、それに對して外部的の原因が非常に妨害を加へて來た、其爲に日本の貿易が非常に阻害されて來たと云ふことが新しい原因になつて來たのであります、別の言葉で言ひますと、經濟的には非常に優勢でドン／＼物が出て行くが、政治的に外國から之を壓迫する力が強くなつた、斯う云ふ力が進んで行けば從來のやうな樂觀は許さないのでないかと云ふのが今日の問題であります、非常に輸出が減退して行くとは考へられない、が躍進又躍進と今までのやうに進んで行くとは考へられない日本にとつて貿易は非常に重要である、と云ふのは日本の明治初年以來の恐慌を調べて見ますと、日本の恐慌は大體三月に起るのが一番多いのであります、十二月に起ることもありますが、大體三月に起ることが一番多いのであります、何故三月に起るか云ふと、貿易が直接の原因になつて居る、下半期の出超期は宜しいが、一月以後になつて入超期になると猛烈に輸入がやつて來ます、一月、二月にドン／＼入超になつて來ると三月になつて恐慌になる、今の情勢ではさう云ふ心配はありませんけ

れども、それ程に日本の貿易は直接國民經濟に關係のある部面であります、そこで悲観することは間違ひでありますけれども、從來のやうに無條件に樂觀することは許されない、別の言葉で言ふと、今日は國際間が、從來は經濟競争で、安い物、良い物さへ造つて居れば幾らでもドン／＼進出して行つたのが行けなくなつて、政治闘争になつて來た、經濟競争から政治闘争に移つて來たと云ふのが今日の情勢であります。

政治闘争になると、結局國際間の力の問題であります、政治の争は總て力の争であります、國內に於ても、國際間に於てもさうであります、國際間の力の争と云つてもすぐに戦争が始まると云ふ譯ではない、經濟上から言へば結局は力で以て世界の市場の争奪戦をやる、詰り經濟上の戦争が始まりつゝあると云ふのが今日の形勢であります、是が第二の世界戦争に導き易い動機であります、前の世界大戦と云ふのは經濟的に觀ますと是も一つの市場の奪合ひであつたのですが、併し此時は今日と事情が違ひます、それはどう云ふ時代であつたかと云ふに、歐洲大戦前までは十年以上好景氣でありました、一九〇〇年から一九一四年まで經濟躍進の時代で好景氣が続いて居つた、そこで其好景氣に依つて歐洲各國が資本の蓄積をする、其蓄積した資本を何處へ持つて行くかと云ふ資本市場、即ち資本を輸出する市場の奪ひ合ひが起つて、それが亞弗利加を中心にモロッコ問題其他の問題になつて第一の

世界戦争に導いた譯であります、そこであの歐洲大戰は世界の資本市場の争奪戦が昂じて来て歐洲大戰になつたと云ふことが言へるのであります、それに對して今日はさうでなく、日本だけはグン／＼躍進して居りますけれども、世界全般は非常な不景氣で、商品が多過ぎて市場が足りない、世界は購買力不足で賣りに行く所がない、さう云ふ事情であります、そこで今日の時代は、商品市場、世界商品市場の争奪戦、是が昂じて来ると結局又第二の世界戦争になる危険が非常にある、それが一番最初に申上げました、今日の經濟上から見て決して世界は平和に向つて居らん、戦争に向つて居ると云ふ經濟上の一つの根據であります。

さう云ふ譯で、今日の問題は世界市場を何處が取るかと云ふことが問題であります、戦時經濟を考へると、此外に原料獲得、即ち原料を何處から得るか云ふ問題であります、日本としては石炭は持つて居る、滿洲にもありますが、石油を何處から得るか、綿を何處から取るか、羊毛を何處から取るか、鐵を何處から取るかと云ふやうな原料獲得の問題が戦時經濟の中心問題になるのであります、平時經濟では原料獲得は問題になりませんが、平時であれば何處へ行つても喜んで賣つて呉れます、何處でも商品が過剰で困つて居る、石油でも、石炭でも、鐵でも、綿でも、羊毛でも、全部過剰で困つて居るから何處へ行つても喜んで賣つて呉れます、だから平時には原料獲得は問題になりませんが、寧ろ

商品市場が問題です、何處へ持つて行つて賣るか、此點が日本の將來の經濟躍進と云ふことに關聯して來ると思ひます。人に依つては日本の人口問題を非常に心配する、日本の人口は年々百萬人殖える京都の街一つ位の人口が年々殖えて居る、是は日本の將來に取つて非常に問題であると心配する人がありまして、是は何とかして世界各国に移民しなければならんと云ふので、滿洲移民などが考へられて居りますが、全部の増加人口を滿洲にやると云ふことは困難でありまして、寧ろ滿洲の移民は別の意味からやるべきだと思ひます、之に依つて日本の人口問題を解決することは困難であります、年々百萬人づゝ殖えるものを年々五百や千人づゝ滿洲へ送つても問題にならない、別の意味では必要であります、之に依つて人口問題を解決することは困難であります。結局人口問題の解決は市場の問題になります、人口が多いと云ふことは困つたことではない、たゞ人口が多ければそれだけ仕事がないればならん、仕事があれば人は幾ら殖えても構はん、所が仕事があるかどうかと云ふことは結局賣れるか賣れないか、市場があるかないかと云ふことに依つて定まつて來るのであります、まだ二倍でも三倍でも賣れるならば、二倍でも三倍でも造る力はある、物が造られれば人口が殖えても十分やつて行ける、人口を殖やすと同時に仕事を殖やす、其爲には世界市場を何處で獲得するかと云ふことが日本の將來の躍進に非常に大きな問題になつて來るのであります。

そこで世界市場の問題であります、世界市場と言つても世界市場の中心は何處に在るか云ふと結局是は東洋、南洋であります、と云ふのは、世界市場と云ふのは結局人が買ひに来るのでありますから、其買ふ人口が中心である、人口だけではないかん、購買力のある人口が中心であります、それが何處に在るか云ふと、世界の人口が約二十億ありますが、其半分の十億の人口は獨逸、佛蘭西、英吉利、露西亞、亞米利加と云ふやうな國に屬して居るので、さう云ふ人口は世界市場として取ることは出来ない。あとの半分の十億、是が世界市場として各國の奪ひ合ひになつて居るのであります。是は大部分は東洋、南洋であります、此外に亞弗利加、中米、南米と云ふものがありますけれども、是は人口から見て大した問題でない、人口もあり、購買力もあると云ふ點では吾々の東洋及び南洋であります、人口から言つても支那には四億の人口があり、印度に三億五千萬、其外南洋のジャワ、スマトラと云ふ方面は人口が稠密な所で、是等の市場を何處の國が支配するか依つて將來の世界各國の運命が決すると云ふ譯であります、英吉利が百年以上も世界を支配したのも、英吉利が先に進んで世界市場を手に入れてしまつたと云ふことが英吉利が世界を支配して來た經濟上の根底であります。是から世界市場と云ふ點から着目して見ますと、世界市場を支配して將來世界を支配すると云ふ國は日本、亞米利加、英吉利、此三國より外にない、日本か英吉利か、亞米利加か、此三國が世界市場を支配して、場合に依つては世界が決まるとも言へると思ひます、佛蘭西、獨逸、露西亞、伊太利と云ふ國はまだ、大きくもあり勢力もありますが、將來の世界市場と云ふ點から言ふとさう云ふ國々は考へんでもよいと云ふ状態であります。

そこで其世界市場を是からどう云ふ風に分割して行くか、大體に於て今までは英吉利の勢力範圍、詰りプロツクで言ふと大英帝國プロツクと云ふ一つのプロツクを組織して世界市場を維持しようとして居る、そこへ日本が新興勢力として進出して行かうと云ふことになつて居るのが今日の状態でありませんが、さうなると必ず此大英帝國プロツクと云ふものに打突かる、それが今日の日本と英吉利の問題でありまして、今日は日本と印度の問題に付て日印會商と云ふのが現に行はれて居ります、日印協定の期限を延ばすかどうかと云ふので今日日印會商が始まつて居りますが、此日印問題も結局大英帝國の問題であります、印度では同じ商品であつても、日本から行く物は高い關稅をかけて、英吉利から行く物は安い關稅で入れて居る、印度でさう云ふ差別待遇をして居ると云ふことはそれは印度が英帝國プロツク内であるからと云ふのであります、それは印度三億五千萬民衆の爲にやつて居るのかと云ふとそれは逆であります、支配者である英吉利の白人の利益の爲に印度の三億五千萬民衆を犠牲にして、日本の良い安い物を買はせないで、英吉利の高い物を買はすと云ふのが今日の日印問題

であります、其外日本と埃及の問題、日本と濠洲の問題、日本と蘭領印度の問題——是は直接には日本と和蘭との問題であります、蘭領印度は英吉利の資本が非常に支配して居りますので、例へばあその石油は全部英吉利の資本が支配して居ります、蘭領印度の背後には英吉利が控へて居るのであります。

所でこの英帝國ブロックに對して大亞細亞ブロックと云ふことが考へられて居ります、日本でも大亞細亞協會と云ふのが出来て居りまして松井大將閣下が唱へられて居りまして、京都にも支部が結成されることになつて居りますが、其大亞細亞主義と云ふのが、私共の方から言ふと詰り經濟ブロックを作ると云ふ問題であります、大亞細亞經濟ブロックを作ると云ふ問題であります、さうしなければ日本の今後の經濟の躍進は出来ないと言ふのが私の結論であります、日滿ブロックが出来て御承知の通り段々進んで来て居ります、之は勿論よいことで大いにやらなければなりません、日滿ブロックではまだ不十分であります、是だけでは將來の經濟の躍進は出来ない、と云ふのは、滿洲には非常に豊富に物があります、例へば石炭が出る、大豆が出る、小麥が出る、高粱が出る、いろいろの豊富な富源がありますけれども、併し軍事上から言つて必要な石油が滿洲には無い、羊毛も無い、最近問題になりましたがさう大して出来ない、棉花も餘り出来ない、棉花は北支那の方が滿洲よりはよい

と云ふことになつて居ります、さう云ふ譯で、原料と云ふ點から言つても日滿ブロックではまだ力が足りません、そこへ以て来て市場——日本の人口の増加、國民經濟の發展から市場が重要であることは前に申しましたが、其市場と云ふ點で滿洲ではまだ足りない、三千萬民衆がおりますけれども餘り購買力がありません、一日五錢か十錢で生活して居る連中が多いのですから餘り物を買ひません、將來經濟的發展を遂げて三千萬民衆が購買力を持つて來れば別であります、まだ市場と云ふ點では足りません、いま日本全體の輸出は二十五億ありますが、之を三十億、四十億と外國へ出すと云ふことになると、滿洲位のブロックでは足りない譯であります、それで之をもつと擴げて支那を入れて日滿支ブロックを作ると云ふ運動が最近出て來たのであります、さうすれば支那には綿は出來るし、又人口が四億ありますから大きな市場があると云ふ點でブロックは強くなるが、併しまだ是れでも石油が支那にはあまり出ません、其他いろいろの點でまだ大英帝國ブロック、若くは亞米利加ブロックに對抗する力はない、亞米利加ではまた合衆國が中心になつて加奈陀、中米、南米を糾合して汎亞米利加ブロック、南北亞米利加ブロックと云ふのを經濟的に形成しようとして居りますから、今日の問題は、外にいろいろありますけれども世界は亞米利加ブロック、英吉利ブロック、日滿支ブロックと云ふ、結局三つのブロックの問題になります、そこで日滿支ブロックもよろしいが、さう云

ふ形勢の中に於てはまだく是れでは足りない、もう一つ之を擴めて大亞細亞ブロックと云ふものを形成しなければならんと云ふことが又言はれて居ります、それは日滿支の外に印度、南洋を加へて大亞細亞ブロックを形成すると云ふのであります、尤も是は政治的に考へるならば殆ど空想に近いことでありまして、一時的の大言壯語で、事實は決して出来るものでないと言へませうが、是は政治問題ではありません、私の言ふのは經濟ブロックであります、だから各國は各々獨立して立派な獨立國として、滿洲國は滿洲國として獨立し、支那は支那、印度は印度、シヤムはシヤム、南洋は南洋と云ふやうに各々獨立して居ればそれでよい、唯其間に經濟ブロックを作つて一つの集團をなして行かうと云ふのでありますから、是は空想でも何でもありません、事實出来ることでもあります、さうすればそれに依つて日本の經濟の發展上重要な市場になつて、日本の物が盛に賣れ、向ふの物も日本が原料品、棉花、石油などを買ふ、それに依つて日本の躍進發展は言ふまでもないことで、向ふも開發される、支那も滿洲も開發され、印度、南洋、總ての國が經濟的に發展する是は、共存共榮である、向ふも榮える、こちらも榮える、是は決して出来ない相談ではない、のみならず、段々さう云ふ方面に進んで行きつゝあると思ひます。

さう云ふ風に進んで行けば、大英帝國ブロック、亞米利加ブロックに對抗して將來世界市場を段々

日本の手に奪回されるのであります、唯國防と關聯して問題になるのは、さう云ふ風に發展して行けばそこに必ず衝突する部面が起つて來ると云ふことであります、それは先づ北では露西亞ブロック、露西亞を中心にして近くのものでブロックを形成して居る、それが北の方で西伯利亞に出來、沿海州に出て來て日滿ブロックと衝突する、併しそれよりも問題は南の方の大英帝國ブロックとの問題であります、即ち日本が段々躍進して行くにつれて英吉利が日本の爲に市場を取られ、或は資本の投資市場を段々取られて行く、それで先程申したやうに英吉利はあらゆる方面、印度、濠洲、埃及、加奈陀、亞弗利加、あらゆる方面で、あらゆる物に付て、羊毛にしても、棉花にしても其他あらゆる産業部門に於て日本の躍進をヒシ／＼と感じて、どうして之を防禦しようかと云ふのが英吉利の今日の最も大きな問題であります、若し日本が大亞細亞ブロック經濟を進めて行くと云ふことになると必然問題になつて來るのは、滿洲、支那、是は問題ではありません、其他の南洋、印度、蘭領印度、南洋諸島と云ふものが問題になるのであります、是は今日英吉利の支配下に在つて植民地として歐羅巴の壓迫を受けて居る、歐羅巴の資本主義の發達は植民地の獲得に依つて發達して居ると云ふことを先程申しましたがそこへ日本が進出して段々躍進の鋒先を向けて行かうと云ふことになるとどう云ふことになるか、私の考では、此點で歐羅巴諸國と日本とは又違ひます、歐羅巴は資本主義に依つて植民地を獲

得しそれを擧取することに依つて發展して來たのでありますが、日本は必ずしもそれを要しない、日本の今後の躍進に於ては、それらの市場、歐羅巴の植民地になつて居る地方が之が植民地としての壓迫から遁れればよい、さうして立派な獨立國になればよい、印度は印度として獨立する、蘭領印度は和蘭から獨立さへすれば日本の物は安くて良いからドン／＼出て行く。今日は歐羅巴から壓迫されて居るから日本の安くて良い物を買はずに歐羅巴の高くて悪い物を買はされて居ると云ふのが今日の状態であります。そこで是等の歐羅巴の植民地を日本が取りに行くことになれば植民地の争奪戦になりますから、血に報ゆるに血を以てすると云ふことになります、それでは結局行詰る、歐羅巴の資本主義が行詰つたと同様に結局日本も其轍を踏んで行詰る、それは日本の躍進に必要でない、日本の將來の躍進と云ふものは結局市場が自由な市場になればよい、自由に何處からでも物を買ふやうになればよい、日本は經濟的の力では何處にも負けないから結局自由な世界市場にさへなればよいのであります、それがなか／＼實際に於ては容易ではないのであります、即ち國防と云ふのは茲に意味を持つて來るのであります、詰り向ふの支配下にある世界市場が獨立すると云ふ爲には必ず國際間の政治的の争が出て來る、別の言葉で言ふと、日本の躍進と云ふことが因になつて結局政治上の力の争と云ふことになり、それに依つて少くとも東洋、南洋の植民地が獨立する、白人の手から脱却すると

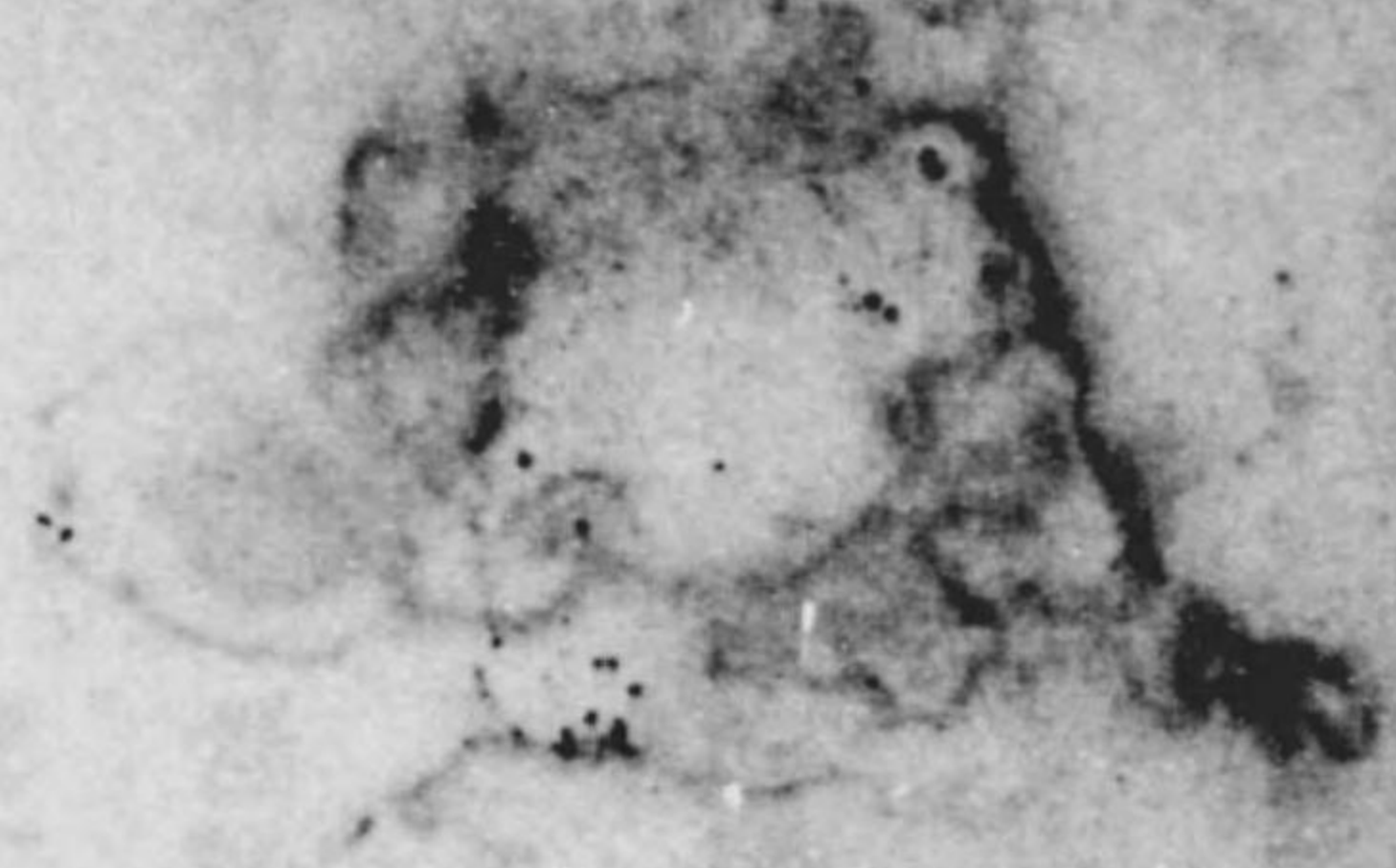
云ふことは是は吾々亞細亞人種として同胞を救ふと云ふ大義名分、亞細亞の同胞を白人種から解放して一つの立派な國民として育てあげると云ふことは日本の將來の大きな使命でなければならん、亞細亞に於て亞細亞同胞の壓迫を撥ね退けて獨立國として立派な國民に育てあげると云ふことは日本の大義名分である、さう云ふ所に日本の大義名分があるとするならば、日本の將來の國防と云ふことは始めてそこに本當の意味を持つて來るものと思ふのであります、大義名分に立脚した同胞の獨立と云ふことは、同時に日本の經濟の躍進になるのであります。

將來の戦争と云ふものには二つの要素がなければならん、即ち大義名分、正義の戦であると云ふことが一つ、同時にそれが經濟發展のための戦であると云ふ、經濟的に觀て、又道德的に觀て、兩方の條件を備へて居ると云ふことが將來の戦争に於ては結局勝利を得ることになるのであります、何れか其片一方だけではいけない、非常に正義の戦であるけれども經濟上非常な不利益になる、經濟上壓迫を蒙ると云ふやうな戦では將來の戦争には勝利は得られない、同時に、非常に利益になる戦であるけれども大義名分がないと云ふ戦では是亦勝利を得ることはむづかしい。國民が奮起して一つになつて働くと云ふことはやはり大義名分があり、同時に日本の躍進する經濟的の必然性を持つと云ふ、此二つの要素が備はつて始めて戦に勝ち得ると云ふことになります。別の言葉で言ふと、經濟的の躍進は

結局する所、日本が今日の儘で萎縮して居るならば別問題であります。將來の經濟の躍進と云ふことを考へて行くならば、結局それは國防に依存する、國防の強化なくては將來世界の市場を支配し、世界を經濟的に支配する。政治的に世界全體を支配すると云ふことは不可能に近いことであると思ひますが、經濟的に支配し、リードして行くことは決して出來ないことはない。それをする爲の經濟的躍進は結局國防と云ふものに依存すると云ふことが其點から言へると思ふのであります。それで大體あとの半分はお分りになつたと思ひます。

要するに初から申しましたやうに、日本の經濟の將來は國防に依存する、經濟は經濟だけで進むことは出來ないと云ふのが今日の狀態であります。經濟は國防に依存する、國防が充實しなければ日本の經濟の發展はないと云ふことがあとの半分の話してあります。併し又同時に國防は國防だけでは決して成立し得ない、經濟力と云ふ經濟のバックがあつて始めて國防が完全を期し得られる。最後の勝利はやはり經濟に依存する、其意味では國防は經濟に依存する、同時に經濟は國防に依存する、此二つは互に兩立する、矛盾しないと云ふだけでなく、此二つが伴はなければ、何れの一つを措いても他は完全を期することが出來ない、一を缺いては他は成立たないと云ふ關係にあると思ふのであります。二つは矛盾するから調和を保たなければならんと云ふ通説では今日は満足することが出來ない、此二

つのものは二にして一である、一にして二である、一を缺いて他はないと云ふ關係にあると云ふことを私は考へて居るのであります。これで大體私の申上げることが終つた譯であります、長い間御清聴下さいましたことを有難く感謝致します、これで私の講演を終ります。



昭和十二年三月二十五日印刷
 昭和十二年三月三十日發行

京都府内
 財團 京都府國防協會
 法人 右代表者
 常務理事 中村國太郎

印刷者
 京都市下立賣小川東人
 中西勝太郎

印刷所
 京都市下立賣小川東人
 中西印刷合名會社

昭和十二年三月二十五日印刷
 昭和十二年三月三十日發行

京都府内
 財團 京都府國防協會
 法人 右代表者
 常務理事 中村國太郎

印刷者
 京都市下立賣小川東人
 中西勝太郎

印刷所
 京都市下立賣小川東人
 中西印刷合名會社

